

リカバリー概念に対する一考察 ～精神的な困難をもつ人の聞き取り調査から～

○小宮 幹晃^{1),2)}

1) 放送大学 教養学部 全科履修生 人間の探求専攻、

2) 特定非営利活動法人 リカバリーサポートセンター ACTIPS 訪問看護ステーション ACT-J

1. 背景と目的

わが国の現状に対し、欧米先進国では1960年～80年代にかけて、精神医療を脱施設化政策に転換しはじめている[伊藤 2003]。しかし、急激な脱施設化を強行したアメリカでは、地域社会内での受け皿となる社会資源を整備しないままに、精神障害をもつ人を退院させた。そのため、精神障害をもつ人のホームレス化や退院しても再入院を繰り返すという回転ドア現象が大きな問題となった。1970年代以降は、これらの問題を解決するためケースマネジメントを中心にコミュニティケアモデルを生み出されてきた[江間 2005]。さらに、1980年代後半より、精神障害をもつ人自身からの手記や語りが相次いで発表され、精神保健サービスのパラダイム変革に影響をあたえた。このような背景のなかで「リカバリー」という考え方が取り上げられるようになった。近年、リカバリー概念はわが国でも注目を集めているが、多様な強調点が混在し、精神障害をもつ当事者や精神保健領域の関係者のなかでも混乱が生じているように思われる。リカバリー概念を理解するうえで、設問形式で断片化されたインタビューには限界があり、個人の固有の社会基盤とそれに付随する諸関係そのものの現実的な生活像・社会像の物語を聞くことが重要であるように思われる。このような状況を踏まえながら、本調査では精神的な困難をもつ人の語りを発掘し、その個別的・状況的な物語をリカバリーの理解に役立てることに意義をおくものである。

2. 方法

聞き取り調査は、私が2008年9月から11月までの期間において行ったもので、7名の対象者に実

施した。場所は可能な限り、生活の様子がイメージできるよう、協力者の自宅あるいは、居住地に近い場所を選んだ。回数は1人あたり約2～3回、1回につき1時間～2時間実施した。

3. 結果と考察

リカバリー概念は精神障害の理解と治療の考え方に変化をもたらし、1990年代以降の精神保健システムの指針となるといわれている[半澤 2005]。精神障害をもつ人の語りから浮上したリカバリー概念を理解したいとき、我われ精神保健のサービス提供者は、自分自身のリカバリー、あるいは目の前にいる人のリカバリーについて考えることは大切であると思われる。また、そのプロセスと向き合いたいとき、まずは「支援者」であるより、ひとりの人として、目の前の人と「出逢う」ことが重要だと思われる。ある方法で分類された人々は、自分たちが分類された通りに変化していく傾向にある[北沢 1995]という考え方があるように、誰が誰を、どのように理解し、何かを行うかによって物事が決まっていくという事実を顧みることが重要だと思われる。つまり、ある治療法・プログラムなどを持ち出す前に、Aという人(サービス利用者)とBという人(サービス提供者)がたまたま出会って、関わりあうという「関係性」が根底にあり、前提になると考える。当日の発表では聞き取り調査の詳細とその結果に考察を加えて、リカバリー概念の理解に対する一考察を紹介する。